

●単三型充電式電池『エネルギー』

No.33 で紹介させて頂きました単三型充電式電池ですが、遅ればせながらハナ勘でも取り扱いを始めましたので改めて紹介させて頂きます。従来の充電式電池の欠点である「メモリ効果（継ぎ足し充電すると継ぎ足した分しか使えず、繰り返すことにより電池の寿命が極端に短くなる現象）」と「自己放電」がほとんどなく取り扱いが容易なことが利点で、単三型電池を使用するデジカメには是非、使って頂きたい電池です。そして、何もデジカメだけではなく、ニコンの F100 など単三型電池を使用するフィルムカメラにもおススメ

なのです。フィルムカメラの場合、アルカリ電池でも充分、長持ちしますが（注：オキシライド電池やデジカメ専用のニッケルマンガン電池は初期電圧が高く故障の原因になるので使わないで下さい）、おススメする最大の理由は寒さに強いことです。冬季の撮影では、アルカリ電池は0度近くで電圧が低下してカメラが動かなくなってしまいますが、『エネルギー』はマイナス20度ぐらいまでなら電圧が下がらないので雪景色の撮影でも電池を気にせず撮影できます。来季の冬に備え是非、お求め下さい。

●分割測光と露出補正

ハナ勘の撮影会や写真教室で撮影部長が口をすっぱくして説明するのが露出補正です。これは、カメラの自動露出が反射光式露出計で測光されていて、シーンによっては露出アンダーになったりオーバーになったりするからです。私もフィルムカメラを使用する時は経験的に補正を行うのですが、これは、今まで使用してきたカメラの「中央重点平均測光」に基づいて判断しています。ところが、近年のカメラの測光方式は「分割測光（ニコンは「マルチパターン測光」、キャノンは「評価測光」といいます）」が主流でカメラがある程度、露出補正を行っているのです。問題は、この自動露出補正というべき機能が完璧ではなく、あくまでも「ある程度」だということと、やっかいなことに補正しすぎたり、足りなかったりすることがあるのです。たとえば、遠景の写真で半分ぐらい空が画面を占める場合、通常、プラス0.5～0.7の補正をするのですが、分割測

光だと補正しすぎてしまい、ノーマルでもオーバーになることがあるので、逆にマイナス0.3～0.5の補正が必要なことがあります。撮影会で「必ずノーマルも撮って下さい」、「判断が難しい時はプラス・マイナス両方、撮って下さい」と申し上げているのは、こういった理由からです。さて、デジカメの場合ですが、最大の利点である、その場で確認できる機能を使って、まず、ノーマル撮影を行い、確認して必要であれば補正して撮り直します。特に最近のデジイチは、分割測光の精度が良くなっているようで、補正を必要とするシーンが少なくなっているようです。また、その都度、確認していたらシャッターチャンスを逃すような場合、まず、試し撮りして露出を確認し補正量を決めておき、それからシャッターチャンスを狙うという撮り方もデジカメならではの撮影方法だと思います。

●オートフォーカスの使いこなし

カメラがオートフォーカス（以下AF）になって久しく、性能も年々、進化を遂げています。しかし、自動露出同様、完璧でないのが玉にキズです。AFの苦手な（ピントが合わない）シーンは説明書に書かれていますので、是非、一読されて覚えておいて下さい。そういうシーンでは、手動（マニュアルフォーカス：MF）に切り替えて撮影する必要があります。AFの性能はカメラの価格なりで高額な上位機種は耐久性や連写性能だけではありません。AFポイントの数も多く、精度の高いセンサーが使われていて、下位機種ではピントの合わないシーンでも高い確率でピントを合わせます。さて、ここでは、AFモードとエリアモードの組み合わせについて書かせて頂きます。通常、風景写真や静止している被写体の場合、AFモードはシングル（S-AF、キャノン：ワンショットAF、メーカーにより呼称が異なります）で、ピントが合わないとシャッターが切れない設定です。この時のエリアモードはシングルエリア（キャノン：AFフレーム任意選択）にして、選択したAFポイントでフォーカスロック（シャッターボタン半押しのまま）を行い、構図を調整し撮影するのが基本です。カメラが自動でAFポイントを選ぶオートエリア（ニコン：至近優先ダイナミックエリア、キャノン：

AFフレーム自動選択）では、意図した所と違う所にピントが合ったりするのでおススメできません。動いている被写体を撮影する場合、AFモードをコンティニューアス（C-AF、キャノン：AIサーボAF）にすると動体追従が行われますが、ピントが合わなくてもシャッターが切れます。この時のエリアモードはオートエリア（ニコン：通常のダイナミックエリア、キャノン：AFフレーム自動選択）にするのが基本ですが、被写体が一定方向で向かってくるような時は、シングルエリアにする方が、より正確に追従します。機種によってオートAFモード（A-AF、キャノン：AIフォーカスAF）がありますが、このモードは、S-AFから被写体が動くと自動的にC-AFに切り替わるモードです。ただ、フォーカスロックをして構図を動かした時、カメラは被写体が動いたと判断してピントを合わせ直すことがあるので、風景などでは、おススメできません。ニコンのD3・D300の場合、風景はS-AFでもかまいませんが、スナップ的な撮影では被写体が静止していてもC-AFでダイナミックエリアの3Dトラッキングに設定することをおススメします。いずれにしても、機種により性能が異なるのでお使いになっているカメラのクセを把握しておくのが良いでしょう。